特別展 ジョルジュ・ビゴー

明治日本を生きたフランス人画家

GEORGES BIGOT

IL Y A CENT ANS, UN ARTISTE FRANÇAIS AU JAPON.

会　期

昭和62年４月７日(火)
〜
昭和62年５月17日(日)

（会期中一部陳列替えをいたします）

会　場

第一会場
（地下1階、主陳列室）
第二会場
（2階、サロンミューゼ、特別陳列室）

主催　渋谷区立松濤美術館
　　美術館連絡協議会
　　読売新聞社
後援　文化庁
　　フランス大使館
協賛　花王株式会社

傘を差した子守　1886年８月27日
油彩

渋谷区立松濤美術館

解　説

今から約100年前、明治中期の日本に18年間滞在したフランス人画家ジョルジュ・ビゴー(1860～1927)は、諷刺画家、風俗画家、そして雑誌記者や報道写真家として活躍し、数多くの作品を残しました。

ビゴーは、挿絵画家として活躍していましたが、日本美術愛好家との交流などを通じて、浮世絵の国、日本への憧れを抱き、明治15年、21歳の時来日しました。

はじめ、陸軍士官学校などで、図画やフランス語を教えながら、墨絵や書道などを学び、次第に日本の生活と文化に通じて行ったビゴーは、生活の為に、「おはよ」、「また」、「クロッキ・ジャポネ」などの銅版画集を次々に刊行してゆきました。これらの画集には、日本の庶民生活が、好奇と愛情の眼差しで、生き生きと描かれています。

明治20年代になると、新聞や雑誌の執筆や挿絵の仕事が中心になり、時局諷刺雑誌「トバエ」を発刊して、在日外国人の為に、時事問題を扱い、諷刺画を数多く描きました。これらの雑誌は、当時の自由民権運動にも影響を与えました。

更に、ビゴーは、日本各地の風俗や事件の取材を精力的に行い、生々しいスケッチを数多く残しています。明治27年に、「ザ・グラフィック」紙の特派通信員として、日清戦争に従軍取材し、朝鮮庶民の姿や従軍兵を描写し、日本人が描かなかった虐げられた人々や戦争の暗部を鋭く表現しています。

ビゴーは、日本の政治などを諷刺もしましたが、日本に深い愛情を持っていました。しかし、日清戦争以降、日本は次第に軍国化し、官憲による言論への圧迫も強まり、ついに、外国人居留地の撤廃が決定されます。「古きよき日本」はビゴーにとって、「いたたまれない日本」へと変貌していきました。明治32年、彼はついに日本を離れ、帰国しました。

フランスでは、彼の日本の諷刺画が、一時人々の興味を引いたものの、次第に世間から忘れられてゆきました。ビゴーは、余生を過ごしたパリ郊外、ビエーブルのアトリエにある日本庭園で、絵筆を握ったまま世を去りました。67歳でした。

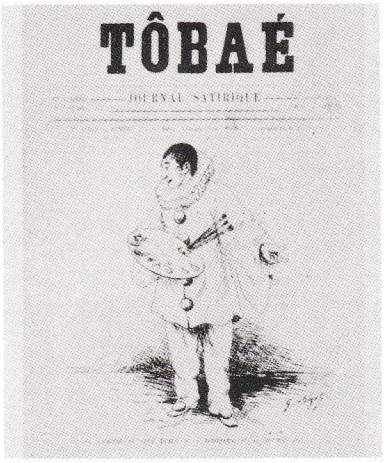
本展は、フランスの遺族の方々が所蔵していた作品を中心に、油彩、水彩、スケッチ、デッサン、版画、ポスター、アルバム、書簡など400点近くの大部分が未公開の作品で構成されます。画家、ジャーナリストとしてのビゴーの全体像を再認識するうえで、初めての本格的な回顧展です。

渋谷区は、昭和60年５月パリ市六区との間に文化交流協定を結び、同年11月には「パリ市六区の三美術館所蔵、エベール・ドラクロワ・ザッキン　エベールの絵画初公開　」の記念特別展を開催するなど文化交流を継続しています。ビゴーが通った美術学校、帰国後住んだ場所は、パリ市六区にありました。本展は、日本における展観終了後、パリ市六区区役所においてフランスでも初公開されます。日本とフランスのかけ橋となったビゴーの展観が、渋谷区とパリ市六区で相ついで開催されることは、両区の文化交流にとって喜ばしいことです。

▲侍姿のビゴー　横浜にて、1882年４月７日

▼文を読む女　油彩

▼諷刺雑誌「トバエ」第７号表紙



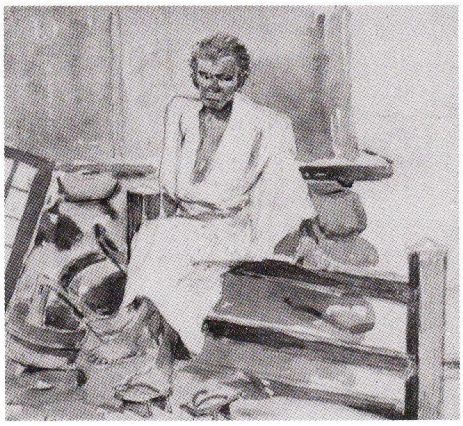
▼中国

ビゴー略年譜

万延元年(1860)	官史オーギュスト・ビゴーの子として、パリに生まれる。母デジレは画家であった。
明治５年(1872)	美術学校に入学、カロリス・デュランらから指導を受ける。
明治９年(1876)	美術学校を中退し、新聞や雑誌の仕事をする。
明治14年(1881)	暮、マルセイユを出発、21歳。
明治15年(1882)	１月26日に横浜港に到着する。フーク家に滞在。その後、陸軍士官学校の画学教師を勤め、市ヶ谷の佐野家に移り住む。少女マスに出会う。
明治16年(1883)	最初の銅版画集「あさ」「おはよ」を出版。
明治17年(1884)	陸軍士官学校の契約期限が切れる。雑誌「トバエ」(第一次) を刊行。
明治18年(1885)	中江兆民の仏学塾でフランス語を教える。「改進新聞」などの諸新聞雑誌にさかんに挿絵をかく。
明治19年(1886)	銅版画集「クロッキ・ジャポネ」発行。
明治20年(1887)	時局諷刺雑誌「トバエ」(第二次) を中心に諷刺画家としての本格的な活動を始める。
明治21年(1888)	磐梯山噴火の被害を取材し、スケッチをする。
明治24年(1891)	濃尾大地震の被害の取材に行き、写真に撮り、スケッチをする。
明治26年(1893)	シベリアと中国を旅行する。京都へ行く。
明治27年(1894)	７月、佐野マスと結婚。日清戦争が起こり、「ザ・グラフィック」紙の特派通信員として朝鮮に行く。
明治28年(1895)	息子ガストン・モーリス生まれる。「ショッキング・オ・ジャポン」発行。
明治30年(1897)	このころ画集、本を多く出版。
明治32年(1899)	マスと別れ息子を連れて６月に帰国（居留地撤廃の１ヶ月前)40歳、暮にマルガリット・デプレと結婚。
明治40年(1907)	パリ郊外ビェーブルに移り住む。
昭和２年(1927)	ビェーブルにて死去 67歳

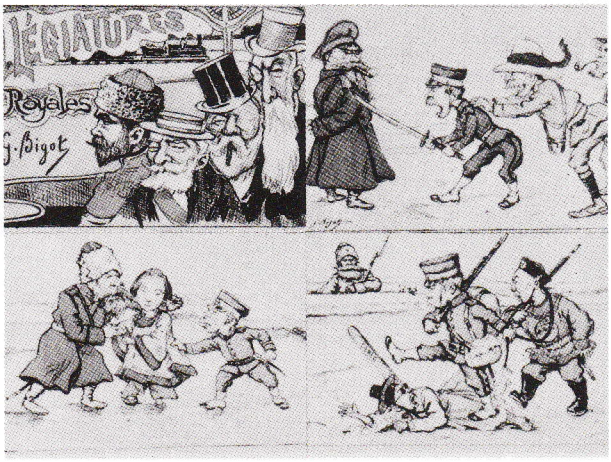
▼吉原・遊女半身像　1898年　ペン、色鉛筆

▼中江兆民像　水彩

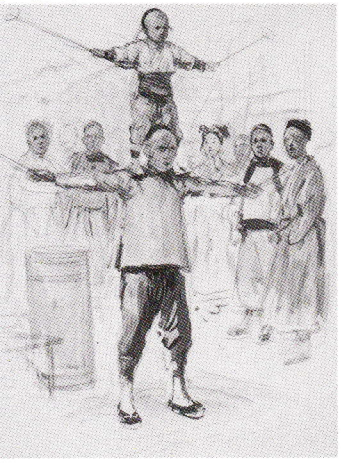


▼諷刺画絵葉書　アジア支配を夢みる日本

▼諷刺画絵葉書 王たちの別荘暮し 他



・軽業師　水彩、ペン



■講　演　会

4月18日(土)　2:00～4:00
「ビゴーと明治日本」
日本仏学史学会会員　清水　勲氏

5月2日(土)　2:00～4:00
「ジャポニズムからジャーナリズムへ
画家　ジョルジュ・ビゴー」
ラクロワ・レベヌマン紙 東京特派員
エレーヌ・コルヌヴァン氏

■美術相談

美術作家を招き、皆さんの作品を見ながら、技術指導や相談を行います。美術史・美術図書の相談にも応じます。

★相談日時・相談員
4月26日(日)　午後1:00～4:00
洋画家 西嶋 俊親氏／日本画家 滝沢 具幸氏
5月17日(日)　午後1:00～4:00
洋画家 遠藤 原三氏／版画家 畑農 照雄氏

★申込方法　事前に電話で相談内容をお知らせください。

★料　　金　入館料のみ

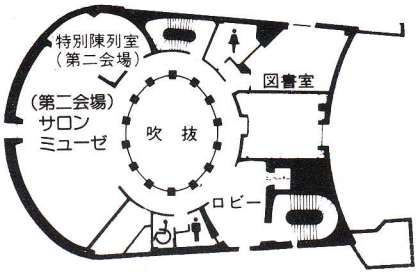
■美術映画会

★4月19日(日)　午後2:00～3:00
「ショッキング・オ・ジャポン
―ビゴーが見た明治日本―」

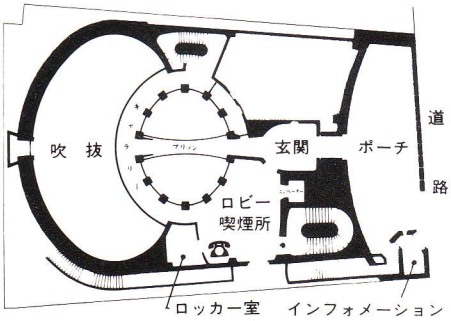
★5月5日(祝)　午後2:00～4:00
「プラド美術館」

松濤美術館・平面図

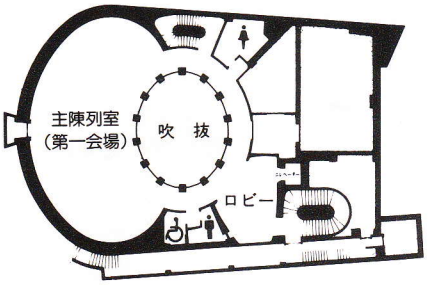
2階



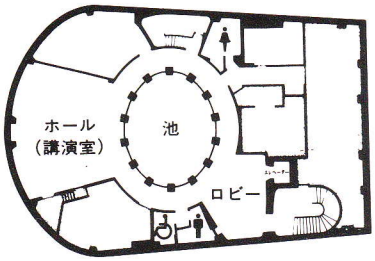
1階



地下1階



地下2階



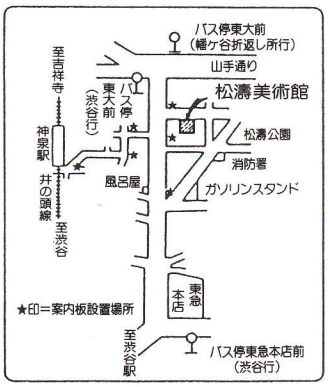
●会　　期　昭和62年4月7日(火)～5月17日(日)

●休 館 日　第2日曜日及び他の週の月曜日　祝日の翌日

※連休にともない、会期中の休館日は、以下のとおり変更されます。
4月12日(日)・20日(月)・27日(月)
5月6日(水)　～　10日(日)

●開館時間　午前9時～午後5時(ただし入館は4時30分)

●入 館 料

	個　人	団体(20人以上)
一　　般	２００円	１６０円
小中学生	１００円	８０円

案　内　図